

# ごあいさつ

日本免疫病治療研究会 会長 西原克成

第5回日本免疫病治療研究会が平成15年1月31日に会員150人の出席を得て開催されました。

今日ほど西洋文明と医学が頼りにならない時代はありません。今まさに本会の如く難病の原因を明らかにし治療法を樹立する研究会が国民のみならず医師に求められています。分子生物学の隆盛の時代を経て技術革新の時代には、超音波診断器やCTやNMR等の開発で21世紀の難病克服の医学が約束されたかに見えました。しかし実際には欧米系キリスト教文明の世紀末の医学・生命科学の発展は完璧に幻想でした。

キリスト教自然神学に基礎を置く近代西洋医学の急速の進歩は、言うまでもなくコッホやパスツールによる細菌学の樹立に負うところが絶大であります。それまでは神の摂理とされていた疫病が、病原性微生物による伝染病であることが明らかにされました。肉眼による解剖学から顕微鏡による組織解剖学が分離したのも、細胞の構造が大略明らかになったのもこの頃です。医化学と呼ばれていた生化学や電気生理学も、ほんの百年前、たったの3万6千日前に出来たものです。そしてビタミンやホルモンの存在が明らかとなり、これまで不明とされていた病気の原因も徐々に明らかにされて来ました。

電子顕微鏡の時代とともに分子生物学が隆盛を極め、遺伝子の機能や蛋白質・核酸・脂質・糖質の代謝やホルモンの働き、エネルギー代謝や細胞呼吸が分子レベルで解明されました。真核生物と原核生物、ウィルスとの違いも細胞レベルと分子レベルで明らかになってきました。電子顕微鏡の開発も分子生物学の開拓も、ともに近代原子物理学の発展に基づく還元主義による科学研究手法の絶大なる成果に負っています。この物理学の基礎的背景には、質量保存則からエネルギー保存則への変革があります。これは西欧キリスト教世界の宇宙理解に対して革命的に思想的変革を迫るものです。

物理学を手本とした近代医学は、微小の世界にのめりこんで身動きが取れなくなっています。細胞一つ取ってみても、それが何百種もありますから電子顕微鏡で何十万倍かにして観察すればヒトの細胞をすべて把握するのに何十年か

かるかしれません。細胞内には細胞小器官がおびただしい数で存在します。しかも多種多様な細胞が 60 兆個も集まって哺乳動物が出来ていて、1 日に 1 兆個が作り換わるとなれば、個々の細胞を全体として統合しているシステムを考える暇など一般の医学者にはありません。

医学はどんどん臓器別に分かれて、医者は臓器のことだけを扱うようになってしまいました。そして誰一人として、どうして臓器が病気で駄目になるのかを考える医者がいなくなってしまうました。駄目になった臓器を部品を交換する如く移植して回復しようという考えの虜となってしまいました。これもまたキリスト教文明と深く関係しています。この宗教は食人の部族の宗教です。指導者の血と肉を食ってその霊力を受け継ぐ宗教です。仮死状態のヒトの生きている臓器を生きたまま抜き出して死にかかっている病人の臓器と交換するのを当然とするのが基督教の医学です。

器官移植の発想は 1901 年の人の血液型の発見に続く輸血が始まりです。アレクシス・カレルは 1911 年に血管縫合術により、動物を使って臓器移植の原理を開発し、この功績によりノーベル医学生理学賞を受けました。臓器移植には移植免疫が働きます。移植免疫学はル・ドワランの胎生期のヒヨコとウズラの神経堤の交換移植に始まります。今日の西洋医学の混乱は、この移植免疫の現象を病気一般の免疫現象と混同したことにあります。いわゆる「自己・非自己の免疫学」の誤りです。「免疫の意味論」という著書はサイエンスとは何か？生命とは何か？キリスト教自然神学とは何か？文学と自然科学とはどう違うのか？を知らない三文文学士の著書です。このお墨付きで、我が国の免疫病患者は治らないでも当然と考える医者に苦しめられるようになりました。今日の自己・非自己の免疫学で解かるように現代西洋医学は完全にキリスト教自然神学の目的論の上に成り立つ大人のお伽話の医学だったので。

キリスト教の世界観では宇宙は、全て質量のある物質のみによって成立しています。質量のない物質エネルギーによる現象はすべて超常現象として「神の領域」となっています。そして人の子イエスは、神の子であるが故に質量のある肉体を持ちながら、質量のない神の領域にも属し、昇天することも出来れば復活することも出来、従って彼は神でもあるのです。当然生まれた時も後付けとして処女懐胎ということになるのです。個体発生と系統発生に関連性を解明した E.ヘッケルですらも 20 世紀初頭に基督教自然神学と進化学を調和させようと試みて、このために彼は科学の世界から脱落してしまいました。質量のある物質（仏教で色という）が、ある極限状態で質量のないエネルギー（空）と等価となるという事がエネルギー保存則です。この法則のもとでは基督教も色即是空となってしまいますから仏教と同様にこの宇宙に神の領域がなくなってしまう。つまりエネルギー保存則のもとで基督教に基づく学問は成立が困難となるのです。これが今日のキリスト教世界の混乱の原因であり、アメリカ社会の混迷の源です。西洋医学の無力化はこの質量のないエネルギーが原因と

なって病気が発症することを認識することを拒んでいるところにあります。つまり今日の西洋医学は、いまだ旧態のキリスト教神学に基づくエネルギー不在の医学だったのです。

病原微生物が明らかとなり抗生物質が開発され、病気が克服されそうになったのが今から 30 年前頃です。しかしこの頃からそれ迄原因不明とされていた難治性疾患が増え始めました。ちょうどこの頃に、我が国の経済は奇跡といわれるくらいに発展しました。その割に国民は貧しいため先進国からは働きすぎのうさぎ小屋の住人と蔑まれました。働くということはエネルギーを過剰に使うことです。疲労とは個体の産生するエネルギーと消費するそれが収支のうえでマイナスになるということです。

自己・非自己の大人のお伽噺では解明不能の難治性の疾患の原因は一体何なのでしょう？これらの患者と症状と検査データと病気発症時の患者の疲労状態をつき合わせれば、いとも簡単に原因が明らかとなります。疲労状態では身体のリモデリングに障害が出ます。従来エネルギーのことをど忘れしていたのが西洋医学です。そして CRP や抗核抗体や IgE は何かといえば、非病原性の腸内細菌の不顕性の細胞内感染病が、体の中の特定の器官や臓器に起きているということです。質量のないエネルギーに目覚めましょう。エネルギーが原因で病気になることがあるのです。質量のないエネルギーの働きを知れば、癌を含め免疫病の発症の原因から治療法まで全てはもう解明されています。エネルギーとエネルギー代謝の細胞呼吸を見落としていたために免疫病が発症していたのです。

第 5 回の研究会では、解明された成果を発表いたしました。エネルギーに目覚めたら生き方を正さなければなりません。

2004 年 5 月